

## 木鼻（きばな）

人々の悪夢を食べてくれるという獺の彫刻がみられるが、この部分を木鼻と言います。木鼻とは、木端ともあらわされるように、「木の端」を意味している。複数の縦柱を横に貫いている柱（頭貫：かしらぬき）や虹梁（こうりょう）等の端に付けられた彫刻のことである。

歴史的には平安時代までの和様では一部例外を除いては、木鼻は見られない。

鎌倉時代になると、東大寺南大門（再建）に代表される大仏様、さらに禅宗とともに渡来した禅宗様が登場し、この建築様式から木鼻も登場した。初期の木鼻は、現在のような別木で製作したものを取り付けした装飾性の高いものではなく、突き出した柱の先端を彫刻した素朴な感じで形もシンプルなものだった。

室町時代になると大仏様はすたれて、他の建築様式と融合した折衷様へ木鼻等が受け継がれて新たな展開を示した。禅宗様も室町時代には折衷様へと同じ道をたどっていたが、木鼻はより装飾的になり、やがて、別木で作成したものを取り付ける「掛け鼻」構造へと変わっていった。

木鼻の取り付けられた場所で一番多いのは、向拝正面の頭貫部分である。大きく分けると、頭貫のみに付けられた物と頭貫と直角に交わる虹梁の両方に付けられた物に分かれる。後者の場合には、同じ物と別物の組合せがある。

